

2019 年度第 1 回支部集会【北海道支部】

主催：公益社団法人日本語教育学会

共催：北海道大学 高等教育推進機構国際教育研究部，北海道日本語教育ネットワーク

後援：公益財団法人札幌国際プラザ

日時：2019 年 7 月 13 日（土）10:25～17:30（受付開始：10:00）

会場：北海道大学 学生交流ステーション2F 大講義室 209

（〒060-0815 札幌市北区北 15 条西 8 丁目）

交通アクセス：<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/campus/campusmap/>

※JR 札幌駅北口より徒歩 20 分，地下鉄南北線「北 12 条駅」より徒歩 10 分

※札幌キャンパス地図上では、「国際連携機構国際教育研究センター」と表示

参加費：500 円（当日会場にて，現金でお支払いください）

※おおよその人数把握のため，ご参加予定の方は，6 月 11 日（火）～7 月 11 日（木）に学会ウェブ

ページのマイページから事前参加登録をお願いいたします。事前参加登録について詳しく

は，こちらをご覧ください。会場に余裕があれば当日参加も可能です。

問合せ先：公益社団法人日本語教育学会支部活動委員会

E-mail: shibu@nkg.or.jp TEL: 03-3262-4291（平日 9～18 時のみ）

◆支部集会日程◆

2019 年 7 月 13 日（土） 会場：大講義室 209	
10:00	受付開始
10:25-10:30	開会挨拶
10:30-12:00	ポスター発表・交流ひろば
13:00-15:15	口頭発表
15:30-17:25	講演（＋フロアディスカッション）
17:25-17:30	閉会挨拶

開会挨拶

【10:25-10:30／大講義室 209】

ポスター発表

【10:30-12:00／大講義室 209】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム p.4～，詳細は予稿集原稿をご覧ください。

① 留学生に対する日本語学習カウンセリングの意義と課題 3

—学習カウンセリング報告の分析から—

天坂華織（武蔵野大学），平井君代（同），堀井恵子（同）

- ② 介護分野技能実習生への入国後日本語講習 –ミャンマー人実習生に対する授業実践から–
守岡みのり(北海学園大学大学院生), 田澤あす美(同)
- ③ 母語話者の初級日本語学習者に対する説明の仕方を選択するプロセス
–ロールプレイタスク後のフォローアップ・インタビューをもとに–
安藤郁美(名古屋大学大学院生)
- ④ 震災後に就職した元留学生在が帰国を考えると
–二人のライフストーリーから自己実現を考察する
田中敦子(慶應義塾大学), 池田朋子(マギル大学)

交流ひろば

【10:30-12:00／大講義室 209】

※「交流ひろば」は、日本語教育とその関連領域の話題についての参加者相互の情報共有および同じ興味や問題意識を持つ者同士のネットワーク作りを目的としています。審査を経た学会発表ではありません。

「交流ひろば」への出展は、学会員・非会員に限らずどなたでも可能です。

① 留学生就職促進プログラムにおけるビジネス日本語授業の実践例

中川健司(横浜国立大学), 鈴木綾乃(横浜市立大学)

本年2月にヨコハマ・カナガワ留学生就職促進プログラムの一環として、神奈川県内のNPO法人と連携してビジネス日本語の授業を行いました。交流ひろばでは、実際の連携授業の内容について紹介した上で、留学生にとってどのようなビジネス日本語の指導が必要なのかについて意見交換を行いたいと考えています。

② 外国人と交流から共生へ –北海道 C 町の取り組みから–

式部絢子(北海道大学)

外国人との「交流」から「共生」へ。その目的や関わり方が変わってきた北海道 C 町での取り組みを紹介します。外国人と町をつなぐコーディネーターの役割をしている発表者の視点や考え方の変化などもみなさまと共有し意見交換できればと思います。「多文化共生」をキーワードに活動している方、ぜひお立ち寄りください。

③ 中国語母語話者への句読点指導の試み

二通信子(元東京大学), 黄美花(北海道大学)

論理的で明快な文を書くためには句読点の適切な使用が不可欠です。しかし、中国語母語話者の作文には句読点の使い方について共通した問題が見られます。私たちは中国語の句読点や文構造の特徴を調べ、それらを考慮した句読点の指導について考えました。その検討の過程や教材例を示し、参加者と話し合いたいと思います。

④ 初級で学んだ文法を使いこなして表現できるようになるための教材を考える

阿部仁美(北海道大学), 浅井美佐(同), 藤原安佐(同)

初級で学んだ文法を使い、自分が言いたいことをまとめた文章として書けるようになり、発表できるようになるためには、どうしたらよいのでしょうか。身近なことから徐々に論理的な考え方ができるようになるためには、どのように進めていったらよいのでしょうか。実際に授業で使われている教材をお見せしながら実践報告をさせていただきます。

口頭発表

【13:00-15:15／大講義室 209】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム p.7～、詳細は予稿集原稿をご覧ください。

- ① 13:00-13:30 在中国の事業所における日本語会話の分析:「聞き返し」に焦点をあてて
服部明子(三重大学)
- ② 13:35-14:05 対話活動に及ぼす導入インプロゲームの効果
隈上麻衣(長崎大学), 宮本万里(Creative Communication Company)
- ③ 14:10-14:40 教員ではない立場で外国人生活者の日本語学習を支援する人材に必要なとされる知識とは何かー日本語教室の実態調査と人材養成の実践例からの検討ー
中井延美(明海大学)
- ④ 14:45-15:15 CSCL 環境における日台遠隔授業参加者間の社会的相互作用
ー「協働創作演劇」制作過程の学びー
堀越和男(台湾・淡江大学)

講演(+フロアディスカッション)

【15:30-17:25／大講義室 209】

「移民受け入れ社会における日本語教育の現状と課題」

講師:神吉 宇一氏(武蔵野大学 准教授)

新たな入管法が施行され、外国人労働者の受け入れが加速しています。また、「外国人材の受入れ・共生に関する総合的対応策」でも日本語教育の充実の必要性が指摘されており、日本社会における日本語教育は、今後、ますます重要性を増すと思われます。政府は「移民政策をとらない」としていますが、日本は実質的な移民社会と言えると思います。今後の日本社会において、日本語教育はどのような役割を担うことができるでしょうか。みなさんと一緒に考えたいと思います。

閉会挨拶

【17:25-17:30／大講義室 209】

〔2019 年度第 1 回支部集会(北海道大学, 2019.7.13)発表・ポスター発表①〕

留学生に対する日本語学習カウンセリングの意義と課題 3

—学習カウンセリング報告の分析から—

天坂華織・平井君代・堀井恵子

A 大学には留学生の学習支援として日本語学習カウンセリングが設置されている。本研究ではカウンセラーの一人、H の 2018 年前期の報告書の記述部分を内容分析することでその意義と課題を明らかにする。16 週に述べ 149 人が来室、163 の記述項目を本人を含む 3 名で内容分析した。報告内容は①日本語支援 55, ②文章支援 23, ③自律学習・学習ストラテジー支援 23, ④ネットワーク支援 8, ⑤精神・心理的支援 57, ⑥その他 18(複数にまたがる項目あり), の 6 つカテゴリーに分けられた。なお, 18 回利用 2 名など 11 回以上の継続的来室者が 9 名いた。①日本語支援を入り口とする意義②継続的支援の意義③ネットワーク広がり意義④話す時間の意義⑤カウンセラーの成長の意義の 5 つの意義が考察された。留学生の増加の進む近年, 留学生支援の研究は様々にあるが, 日本語支援を切り口に精神的・心理的支援も行いながら留学生の学びをより深める本実践は他の示唆となると考える。

(天坂, 平井, 堀井—武蔵野大学)

〔2019 年度第 1 回支部集会(北海道大学, 2019.7.13)発表・ポスター発表②〕

介護分野技能実習生への入国後日本語講習

—ミャンマー人実習生に対する授業実践から—

守岡みのり・田澤あす美

本稿の目的は, 介護分野の技能実習生への入国後日本語講習における授業実践を振り返り, 日本語講師の授業記録をもとに, 介護の話題・場面シラバスに基づく授業実践例や, 日本語支援からみた制度面の課題を提示することを目的とする。介護の実習生には, 他の技能実習の職種とは異なり日本語要件が設けられ, 日本語教師が講習に携わることが義務付けられた。講習開始当初は, 専門用語を交えた介護場面の日本語授業を中心としていたが, 実習生の 2 年次の在留資格取得の喫緊性から, 日本語能力試験対策も加えた二本柱で講習を進めた。しかし, ①能力試験出題の語彙・文法と介護専門用語と表現の重複が少ない, ②介護現場で優先して求められる「聞く」「話す」の運用力と能力試験を解くための「聞く」「読む」の技能とでは指導目的や方法が異なる, ③入国後に充てられる限られた講習時間では日本語支援に限界がある, などの問題点が明らかになった。

(北海学園大学大学院生)

〔2019 年度第 1 回支部集会(北海道大学, 2019.7.13)発表・ポスター発表③〕

母語話者の初級日本語学習者に対する説明の仕方を選択するプロセス

—ロールプレイトスク後のフォローアップ・インタビューをもとに—

安藤郁美

本研究の目的は、母語話者が非母語話者に説明を行う場面において、母語話者がどのように説明の仕方を相手に合わせて選択するのかを明らかにすることである。初級修了レベルの留学生に説明を行うロールプレイに参加した日本人大学生・大学院生 24 名のフォローアップ・インタビューを、接触経験の多寡で 2 つのグループに分け、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、どちらのデータからも、非母語話者への説明に際して「**始めから配慮する**」または「**始めから配慮しない**」などの【**最初の姿勢**】を取り、実際のやりとりから【**相手の反応の獲得と解釈**】をし、【**相手に合わせた基準を形成**】して【**伝え方の選択**】が行うという循環する構造が得られた。また、ほとんどの概念は接触経験の多寡に関わらず共通しているが、接触経験が多い母語話者からは、接触経験が少ない母語話者のデータには無い 3 つの概念が生成された。

(名古屋大学大学院生)

〔2019 年度第 1 回支部集会(北海道大学, 2019.7.13)発表・ポスター発表④〕

震災後に就職した元留学生が帰国を考えると

—二人のライフストーリーから自己実現を考察する—

田中敦子・池田朋子

外国人労働者数の急増に伴い、多文化共生社会における日本語教育の役割を考えることは喫緊の課題となっている。近年、政府による高度人材の卵である留学生獲得の強化政策が進められているが、取り組みの結果はデータ上の数値でしか現れず、彼らの生活の実態を知る機会は少ない。他者との共生のためには相互理解が必要であるが、それは一人ひとりの声に耳を傾けて自分と他者との違いを認識することから始まる。その声を発信することは日本語教師の役割の一つであろう。本発表は、日本の大学院で原子力を専攻し、東日本大震災を経て就職した二人の元留学生のライフストーリーをもとに、震災が就職活動および入社後に与えた影響や日本人と共に働く経験を通して、彼らがどのように自己実現に至るのか、その経緯と要因を明らかにすることを目的とした。分析、考察の結果、自己実現と帰国を考える時期との関連性および外国人を受け入れる側の課題の存在が示唆された。

(田中—慶應義塾大学, 池田—マギル大学)

[2019 年度第 1 回支部集会(北海道大学, 2019.7.13)発表・口頭発表①]

在中国の事業所における日本語会話の分析

— 「聞き返し」に焦点をあてて—

服部 明子

本研究では、日本語母話者と非母話話者接触場面の職場で日本語を用いた実際のコミュニケーションがどのように行われているのかを会話の質的分析によって記述する。

近年、日系企業などでは、高い日本語能力の外国人材を求める傾向が見られる。会話中に何らかの要因によりトラブルが生じると、円滑なコミュニケーションが行えず、業務に支障をきたすことが予想されるが、接触場面の職場でどのようなやりとりが行われているのかを質的に分析した研究は少ない。

本発表では、中国（上海市）の日系事業所において、日本語母話話者である上司と現地職員の中国人部下（以下、CNS）の就労時間内に録画した実際の会話データを対象とし、CNS が「聞き返し」を行った発話の分析を行った結果から、双方が理解/不理解を表示することが業務遂行に重要であることを示すとともに、日本語教育への応用について考察する。

（三重大学）

[2019 年度第 1 回支部集会(北海道大学, 2019.7.13)発表・口頭発表②]

対話活動に及ぼす導入インプロゲームの効果

隈上麻衣・宮本万里

本研究は、インプロヴィゼーションゲーム（以下：IG）を言語教育において活用することを目的としている。隈上・宮本（2018）は、「情意要因」「語彙習得の困難さ」「言語運用の機会の少なさ」の三つの問題に着目し、それらを解決する効果が IG にあると論じ、学習効果の観点から IG を問題に対応させた「アイスブレイカー」「意味・概念の割当」「言語運用」の三つに分類している。本研究では、隈上・宮本（2018）の指摘する問題のうち特に「情意要因」に注目し、対応する「アイスブレイカー」としての IG の効果について調査を行なった。調査の結果から、導入 IG には「情意要因」を緩和する効果があると考えられる。また、導入 IG を行うことで、一般的により緊張感が高まると考えられる対話活動においても言語習得を促進する効果があることを論じていく。

（隈上-長崎大学，宮本-Creative Communication Company）

[2019 年度第 1 回支部集会(北海道大学, 2019.7.13)発表・口頭発表③]

教員ではない立場で外国人生活者の日本語学習を支援する人材に必要とされる知識とは何か

—日本語教室の実態調査と人材養成の実践例からの検討—

中井延美

本研究は、2018 年に実施した日本語教室の実態調査の結果をもとに、教員ではない立場で外国人生活者に接触する日本人支援者に必要とされる、母語話者としての意識や心構え、コミュニケーション方法を検討し、その結果に基づいた人材養成の実践例を示す。外国人住民との共生社会において、[1] 教員でない立場で彼らの日本語学習を支援する人材が不可欠である、同時に[2]教員である立場で地域の日本語教育を支援するには少なくとも二通りの人材が必要である、という 2 点を主張する。本研究における実態調査は、首都圏近郊 U 市で運営されている 7 教室において、被験者（外国人・日本人）70 名を対象に、関与観察のかたちで 2018 年に実施した。本研究の成果は、外国人住民との共生社会において、「ことば」からくる不安やストレスは「ことば」の面で支援することで軽減されるものであるという方向性を示すことにおいても資するものである。

(明海大学)

[2019 年度第 1 回支部集会(北海道大学, 2019.7.13)発表・口頭発表④]

CSCL 環境における日台遠隔授業参加者間の社会的相互作用

—「協働創作演劇」制作過程の学び—

堀越和男

本研究における授業は、ICT を活用した台湾と日本を繋ぐ国際的な遠隔授業で、前者は大学で日本語を、後者は大学院で日本語教育を学ぶといった互いの特性を活かし、この CSCL 環境の中で与えられた課題を学校間、クラス内、チーム内で協働しながら達成させていく。本研究では、2015 年度 1 学期に行われた遠隔授業の「協働創作演劇」に焦点を当て、日本側院生を中心に調査し、分析、考察を行った。この活動で各チームを指揮する立場にある院生らは演劇の完成を目指し、「学び合いチーム」を形成させていった。これを社会的構成主義の視点から見ると、彼らのそこでの存在は日本語教師としての「正統的周辺参加」であり、このプロセスの中で台湾側学生と共に考え、悩み、感じ、互いを思いやり、助け合おうといった社会的相互作用を通し、教師としての在り方や態度、指導技術に気づきを得、様々な知識を自身に内在化させ、そこに「意味」を見出していた。

(淡江大学)

以上